

平成二十八年年度仏教文学会六月例会  
神戸女子大学古典芸能研究センター開設十五周年記念事業

# 近世における 縁起・僧伝の 集成と展開

日物山真寂寺なる山階寺といふ次は既述寺と名を  
自福寺と号し、齊明天皇位三の十月、蘇我の公、蘇我  
王、乃小山、成生、字流、於山階、拜小伽藍と造、匠人、  
山階、寺、と、い、次、天、武、皇、帝、白、鳳、九、年、十、一、  
月、創、自、此、至、元、祿、二、年、一、千、九、百、九、十、九、年、也、  
於、此、繪、入、彼、山、階、寺、を、も、同、く、予、於、既、述、に、教、一、造、り、て、  
既、述、寺、と、名、を、元、の、天、武、皇、帝、白、鳳、九、年、十、一、月、添、上、郡、平、

十二新下知九拾名、八名、八拾七新

深井號、淡、寺、役、小、角、殿、前、植、櫻、樹、曰、佛、法、温、樹、  
枯、自、爾、以、來、蒼、枝、漸、朽、新、稍、黃、秀、枝、葉、鬱、茂、花、果、鮮、  
麗、見、今、存、焉、  
藥、師、寺、本、朝、四、十、代、天、武、皇、帝、白、鳳、九、年、十、一、  
月、創、自、此、至、元、祿、二、年、一、千、九、百、九、十、九、年、也、  
天、武、皇、帝、白、鳳、九、年、十、一、月、皇、后、有、病、敕、建、藥、師、寺、  
以、祈、冥、祐、恨、不、知、營、構、之、規、沙、門、詐、違、入、定、見、龍、宮、  
之、后、病、愈、以、故、藥、

入場無料・申込不要

近世において、前代までに蓄積された寺社の縁起や高僧の伝記は、どのように集成され、あらたな展開を見せていくのか。また、同時代の情報はどのように汲み上げられているのか。『和州寺社記』（寛文年間成立）と『伽藍開基記』（元禄5年刊）という二書を中心に、その具体的様相を追う。

## 研究発表

近世大和国地誌史における『和州寺社記』の位置

森田貴之（南山大学）

『和州寺社記』の「名所」への意識 ―一つ書き記事より―

柴田芳成（大阪大学）

『伽藍開基記』の可能性 ―懐玉道温の目指したもの―

山崎淳（日本大学）

刊本『伽藍開基記』巻第七と四国遍路

―元禄二年の石手寺仁王像の修復記録を読み解く―

原田寛子（神戸大学大学院博士課程修了）

司会 内田滯子（お茶の水女子大学研究協力員）

## 関連展示のご案内

神戸女子大学古典芸能研究センター展示室では、下記の期間、志水文庫の関連資料を展示します。

期間 6月18日（土）～7月29日（金） \*土日祝日休室（6月18日は開室）

時間 午前10時～午後5時

会場

神戸女子大学教育センター  
五階 特別講義室  
JR三ノ宮駅、阪急・阪神神戸三宮駅、  
神戸市営地下鉄三宮駅より北へ徒歩約15分

日時

平成二十八年六月十八日（土）  
午後一時三〇分から

写真右 筑波大学附属図書館蔵『伽藍開基記』  
写真左 内閣文庫蔵『和州寺社記』

○内容にかんするお問い合わせ

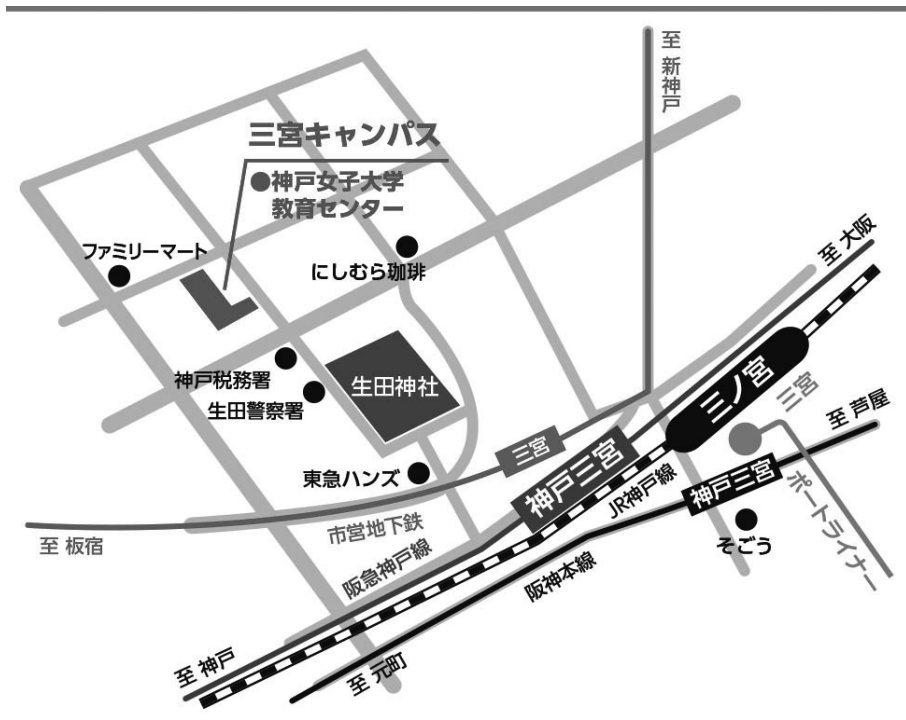
仏教文学会事務局 大正大学文学部大場朗研究室 TEL: 03-3918-7311 (代表) Email: a\_oba@mail.tais.ac.jp

○会場へのアクセスにかんするお問い合わせ

神戸女子大学古典芸能研究センター TEL: (078)231-1061 E-mail: geinou@suma.kobe-wu.ac.jp

〒650-0004 兵庫県神戸市中央区中山手通2丁目23-1 神戸女子大学教育センター2階

## 案内図



※仏教文学会ホームページ (<http://bukkyoubun.jp/>) にも掲載しております。

### 【最寄駅からのアクセス】

#### ■ JR 利用の場合

： JR 三ノ宮駅下車・西口改札／北側（JR 大阪駅から新快速電車で約 20 分）

#### ■ 阪急電車利用の場合

： 神戸三宮駅下車・西改札口（阪急梅田駅から特急電車で約 27 分）

#### ■ 阪神電車利用の場合

： 神戸三宮駅下車・西口（阪神梅田駅から特急電車で約 29 分）

#### ■ 三ノ宮駅・三宮駅から

： 徒歩で約 15 分。タクシーで約 8 分。

## 平成二十八年度 仏教文学会六月例会

### 《特集》近世における縁起・僧伝の集成と展開

近世において、前代までに蓄積されてきた寺社の縁起や高僧の伝記は、どのような形で集成され、新たな展開を見せていくのか、また、同時代の情報はどのように汲み上げられているのか。近世成立の種々の作品に記された縁起や僧伝を見た時、仏教文学研究の立場から、このような興味が湧き上がってくるのは自然なことであろう。

神戸説話研究会では、本年度、『近世寺社伝資料 翻刻と索引』（和泉書院）を刊行することとなった。本書で全文が翻刻される『和州寺社記』（寛文年間成立）と『伽藍開基記』（元禄五年刊）は、右に記した問題を考えていく上で極めて有益な作品である。

しかしながら、これらの作品は、名前こそ知られていたものの、それほど大きな注目を集めてきたというわけではなかった。したがって、このたびの刊行ならびに例会での特集は、研究の新たなスタート地点となる。

本特集では、現段階で得られた知見に基づき、今後の研究深化の礎となるべく、総論・各論双方から報告を行う。

\*

\*

\*

#### 近世大和国地誌史における『和州寺社記』の位置

森田 貴之

寛文年間に成立した著者未詳の大和国を対象とする寺社伝集である『和州寺社記』について基礎的考察を加える。まず、本書の主たる出典となった目される袋中上人『南北二京霊地集』上巻部分（奈良部分）との比較を行うことで、執筆時の現状を重視する寺社の立項方針、当時の観光順路にしたがった配列方針、名所旧跡への注目など、『和州寺社記』において新たに加わった点から『和州寺社記』の編纂意識について検討し、本書が『南北二京霊地集』のような縁起集から、地誌的性格、特に名所案内記的性格へと変化している点について述べる。

また、『和州寺社記』は写本でのみ流通し、刊行されることはなかったが、後出の大和国地誌『南都名所集』『大和名所図会』などには、『和州寺社記』からの引用と思われる箇所も多数指摘できることから、本書を近世大和国地誌史に位置づけることを試み、併せて、本書の諸本異同や成立環境についても言及したい。

#### 『和州寺社記』の「名所」への意識——つ書き記事より——

柴田 芳成

『和州寺社記』（寛文六年・1666）には、主として寺社名で示された項目が、上巻に三一、下巻に二八、収められている。各項目の内容はそれぞれの寺社の縁起や境内の堂塔、仏像の紹介が中心であるが、それらの解説の後に、一つ書きの形式で、寺社周辺の川や森、樹木などに関する記事のみられる例がある。たとえば、「一、佐保の川、奈良の北はつれに流るゝ川を云。水上は花山、芳山の間より出る」（上三・般若寺）、「一、寺内に貫之が梅の木有」「一、同一もとの杉とて名木有」（下一七・長谷寺）などである。

本発表では、これらの一つ書きに注目して、奈良の地誌関連書において本書がはたした役割を考えてみたい。ここに、後の名所記や案内記へと通じる萌芽がみられると考えるからである。本書に先行する『南北二京霊地集』（寛永元年・1624、奈良は上巻）では、「名所」周辺の地名や事物に関する記述はほとんどみられない。一方、後続する地誌には「名所」を書名にもつ『南都名所集』（延宝三年・1675）、『奈良名所八重桜』（延宝六年・1678）などが現れる。『和州社記』が取り上げた「名所」に関する記述は、後続する地誌類にどのような継承された、あるいははされなかったのか、具体的な例を示しながらその様相を探ってゆきたいと考えている。

### 『伽藍開基記』の可能性―懷玉道温の目指したもの―

山崎 淳

『伽藍開基記』（十巻十冊）は、黄檗派の僧侶・懷玉道温によって編纂され、元禄五年（1692）に刊行された。その内容は、日本各地の寺院（少数ながら神社もあり）について、その沿革や、開基僧の伝などを記述したものとなっている。黄檗というフィルターを通して成立し、板本というメディアに乗ったということでは、極めて近世的な作品と言える。特筆すべきは、古代から近世に創建された四百以上の寺院を収録している点、粗密はあるものの地域が東北から九州までにわたっている点である。この分量・範囲は、近世における縁起・僧伝が前代のものをいかに継承し、展開させていったのかを考える上で、実に豊かな材料を提供してくれる可能性を示唆している。今後求められるのは、収録された個々の寺院についての丁寧な検証、同時に作品を絶えず総体として把握していく視点だろう。本発表では、諸本の位置付け、典拠と目される作品との相違に触れつつ、その検討の過程で浮かび上がった道温の着地点、並びに本作品が有している課題を報告することにした。

### 刊本『伽藍開基記』巻第七と四国遍路

原田 寛子

#### ―元禄二年の石手寺仁王像の修復記録を読み解く―

元禄五年刊本『伽藍開基記』巻第七は、所謂「四国八十八所霊場」の寺社を扱う巻であるが、当巻の内容は、すでに書き終えられていた稿本の段階において、序文（元禄二年十二月）と跋文（同三年七月）の年紀より後、丸一卷分が追補されたものであるとの指摘がある。その主たる典拠とされるのが、同時期に刊行された元禄二年の寂本『四国徧礼霊場記』であり、それは、折しも四国遍路が盛行の兆しを見せた元禄時代における先駆的な書物のひとつであった。

本発表では、『伽藍開基記』巻第七に第五十一番霊場石手寺の仁王像（金剛神）に関する記述があることに注目して、同寺に「仁王之記」等の名で伝えられていた元禄二年の修復記録を読み解き、そのような時期に、時事の話題として著者道温が四国八十八所の一卷分を追補したことにはどのような意味があったのかということについて検討を加える。

同時に、石手寺が、四国遍路の開創という点で重要な意味を持つ「右衛門三郎」伝承を戴き、元禄時代前後には霊場として総合的に伽藍を再興しつつあったことにも触れ、『伽藍開基記』においてそれらがどう扱われているかということにも言及する。